

ラウル・デュフィの挿絵本『生命の水：花と果物の精神』

著者	黒澤 美子
雑誌名	公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館研究紀要
号	1
ページ	62-68
発行年	2020-12
URL	http://doi.org/10.50938/00000146

貴重図書紹介——ラウル・デュフィの挿絵本『生命の水：花と果物の精神』

Discussion of a Rare Book—*Eaux-de-vie: Esprit de la Fleur et du Fruit*, Illustrated by Raoul Dufy

黒澤 美子

KUROSAWA Yoshiko

1. はじめに

明るい色彩と伸びやかな筆致の絵画や、多彩なテキスタイルを手がけた20世紀フランスの画家ラウル・デュフィ(1877–1953)は、多くの挿絵本も残している。ギョーム・アポリネール(1880–1918)の詩集『動物詩集あるいはオルフェウスとそのお供たち』¹(1911年刊)には木版画の挿絵を添え、ステファン・マラルメ(1842–1898)の詩集『マドリガル』²(1920年刊)を石版画で彩り、ウジェーヌ・モンフォール(1877–1936)の物語小説『美しい少女』³(1930年刊)にはエッチングによる挿絵を施すなど、その技法は多岐にわたる⁴。また『世界』⁵や『文学・芸術年鑑』⁶などの雑誌にも絵を寄せていた⁷。

画家としての活動初期から晩年まで生涯にわたり制作に携わった挿絵本の本数は50冊以上におよぶが⁸、その中で亡くなった翌年に出版されたのが、本稿で紹介する『生命の水：花と果物の精神』(以下、本書)である。本書はパリのベルナル・クライン社から1954年に刊行された。当館は2018年に本作を新たに収蔵したが、フランスの挿絵本の歴史を主題とした研究書や展覧会カタログ、またデュフィの挿絵本について書かれた文献においても本書は詳しく言及されておらず⁹、制作の背景や完成までの過程は不明な点が多い。そこで本稿ではまず、本書の概要を紹介するとともに、その成立過程を知る手がかりとなる情報をまとめ、今後必要とされる調査を整理する。

2. 内容と挿絵

本書はフランスの歴史学者ルネ・エロン・ド・ヴィルフォス(1903–1985)が文章を執筆したもので、そこにフランスの詩人ジョルジュ・デュアメル(1884–1966)が序文を寄せ、デュフィが挿絵を担当した。300部限定で出版され、当館の所蔵本には169番のエディション番号が付されている。日本を含む世界各国の酒や様々な果実からつくられる蒸留酒を紹介するデュアメルの序文に続き、「花と果物の精神」、「火酒」、「香油」、「酒と詩の女神」といった4つの章により構成されている。挿図には表紙、口絵、11枚の挿絵プレートと、各章の頭に挿入された5点の装飾画が含まれ、技法にはポショワールとエッチングが用いられている。

目次と挿絵位置の関係は以下の通りである。

表紙絵《大地の果実》……fig.1
口絵プレート《作家の肖像》……fig.2
p.11–19「序文」
p.11装飾画《自然の楽園》……fig.3
挿絵プレート1《ムーラン・ド・ラ・ギャレット(ルノワールに倣って)》……fig.4
p.23–27「花と果物の精神」
p.23装飾画《葡萄の収穫の最中》……fig.5
挿絵プレート2《生き茂る春の花》……fig.6
p.31–46「火酒」
p.31装飾画《小麦畑の脱穀機》……fig.7
挿絵プレート3《秋の葡萄畑》……fig.8
挿絵プレート4《赤く装飾された桃とサクランボ》……fig.9
挿絵プレート5《皺の寄った布の上の梨と白いポット》……fig.10
挿絵プレート6《乾杯の時間》……fig.11
p.49–63「香油」
p.49装飾画《干し草に横たわって》……fig.12
挿絵プレート7《芳しき山》……fig.13
挿絵プレート8《黄金の額縁の前の金色の果物》……fig.14
挿絵プレート9《香草と菓草の原生林》……fig.15
挿絵プレート10《うっとりさせる花冠》……fig.16
p.67–70「酒と詩の女神」
p.67装飾画《芸術家の休憩》……fig.17
挿絵プレート11《豊満な恵み》……fig.18

本書の原タイトル『Eaux-de-vie』とはフランス語で「生命の水」を意味するが、ブランデーなどの蒸留酒を指す言葉でもある。そしてその名の通り、本書は様々な角度から蒸留酒について語られている書物である。コニャックなどフランス各地の蒸留酒の生産地の名前を出しながら、蒸留酒に関する歴史的な書物、発展の歩み、著名な生産者、格付け、材料や香りづけの果実や菓草など話題は多方面におよぶ。また各地での蒸留酒の製造にまつわる逸話や、作家や芸術家と酒の関わりについて

も触れられており、ヴィルフォスの博識ぶりが窺える一冊となっている。

挿絵はしかし、書かれている内容と必ずしも合致するものとはなっていない。果実、草花、酒を酌み交わす人々と、蒸留酒と関係するモチーフが描かれているものの、文章の内容そのものの図像化や、文章を補完するような説明的なイラストは見受けられない。カタログ・レゾネに各挿絵が収録されていないか調査したところ、水彩画・グワッシュ・パステルのカタログ・レゾネ¹⁰に掲載されているパリ市立近代美術館の所蔵作品に、本書の6点のプレートが極めて類似していることが判明した¹¹。さらに挿絵プレート6《乾杯の時間》(fig.11)と同図の作品が素描のカタログ・レゾネ¹²に578番の作品《宴会》として掲載されており、文献歴欄に本書が複製図版掲載先として記録されていることが確認できた。そのためパリ市立近代美術館の所蔵作品に類似するプレートや他の図版についても、既存の作品から複製して作成された可能性があると考えられる。本書はデュフィの死後に刊行されていることから、その可能性は充分にあり得ると言えるだろう。同様にデュフィの死後に出された『強いられたヴァカンス』¹³(1956年刊)という挿絵本が存在するが、これも既存の水彩画からの複製画を用いて制作されたものである。同書は友人である詩人ロラン・ドルジュレス(1885-1973)によって選ばれた原画が、版画師のジャック・ベルトラン(1874-1977)によって複製図版化された挿絵本となっている。そうした事例があることから、本書の挿絵も既存の水彩、グワッシュ、素描作品の版画化であるだけでなく、その図の選択がデュフィの生前に依頼され作家自身の手によってなされたのではなく、著者ヴィルフォスによってなされた可能性も検討しなければならないだろう。

ポショワールによって制作された図版は、先述の既存作品との関連から、多くは、または全てが水彩画による下絵に基づくと思われる。デュフィは1900年に故郷ル・アーヴルからパリへ移り住み、美術学校へ入学した当初は印象派の画家たちに影響を受け、1905年頃にはフォーヴィスムに傾倒し、1909年頃からはセザンヌ(1839-1906)などのキュビズムに感化された絵を残している¹⁴。水彩画を多く手がけるようになったのは1920年代からで、ものの動きや瞬間の印象を逃さずに素早いタッチで捉えるためであった¹⁵。軽快な筆づかいを可能にした水彩画の魅力は油絵具の用い方にも影響を及ぼし、油彩画においても、色をたっぷり厚塗りするフォーヴィスムの手法から、淡く自由に薄塗りするように変化したという¹⁶。そうした自由な試みを経て、1920年代から30年代にかけて、デュフィは線描から独立した色彩の配置や形の様式化など独自の画風を確立していった¹⁷。

本書のポショワール画においても、色は輪郭線に縛られることなく自由に塗り上げられており、快活な筆致と明るい色づかいから、1930年代以降に描かれた作品に基づくと思われる。先述の、関連が指摘できるパリ市立美術館所蔵の水彩画

6点は、1930年代後半から1950年前後に描かれている。また本書図版には、デュフィの様々な線表現が見られることも特徴である。例えば挿絵プレート11《豊かな恵み》(fig.18)を例に挙げると、女性像の上半身には、平行する線によって影をつけるアシールという線描技法が用いられており、背景の家や建築物はスピード感のある直線表現で描き込まれている一方で、画面左や画面右上から伸びる枝は太く柔らかな曲線で表されており、画面右下に目を向けると三角形や歪な四角形の記号の反復描画により葉を表現している¹⁸。人物は幅と量感のある輪郭線で象られているのと対照的に、人物足下手前に置かれた果実には細く軽い線が用いられている。本書の図版は、デュフィが独自の画風を確立し、様々な線描表現を獲得した時代の作例といえることができるだろう。

3. 制作背景の手がかり

では、本書はどういった目的で書かれ、なぜデュフィに挿絵の依頼がされたのであろうか。それを明らかにする資料は見つけられていないが、いくつかの手がかりを本稿にまとめた。

まず本書の著者情報から確認すると、執筆者ヴィルフォスは1926年にフランス国立古文書学校で古文書学の学位を取得した考古学者で、フランス、とくにパリの歴史に関する書物を多数著しているなど、歴史家としての側面も持つ人物である。加えて彼は、1930年に博物館担当試験に合格し、パリ市立ティエパレ美術館、パリ郊外のソー公園内にあるイル＝ド＝フランス美術館やパリ3区にあるカルナヴァレ美術館の学芸員を歴任し、展覧会の企画に従事した経歴をもつ¹⁹。デュフィに挿絵を依頼するにいたった過程は不明で、さらにデュフィの生前に本書の依頼をしていたかどうかの事実確認も必要であるが、学芸員という職業背景から、同時代の作家たちとの交流に恵まれていたことは想像に難くない。その人脈は彼が著した他の挿絵本からも推察することができる。ヴィルフォスは本書の他に、パリの風景を切り取った藤田嗣治(1886-1968)の挿絵が添えられた『魅せられたる河』²⁰(1951年)、葡萄畑を牧歌的に描いたモーリス・ブリアンション(1899-1979)の挿絵に彩られた『我らが葡萄畑をめぐって』²¹(1956年刊)、モイーズ・キスリング(1891-1953)への追悼の意を込めてキスリングの鮮やかな版画を挿絵とした『ボヘミアン叙事詩』²²(1959年刊)といった3冊の挿絵本を手がけた。全てパリのベルナル・クライン社から刊行されている。こうした刊行物から、ヴィルフォスが同時代の、とくにエコール・ド・パリの作家たちと交流があったことが窺える。

次に、同じくパリのベルナル・クライン社から出版されている挿絵本『葡萄酒・花・炎』²³(1952年刊)と先述の『我らが葡萄畑をめぐって』、そして本書をあわせて「酒3部作」と名付けている記載が本書の売立目録に多数見受けられることに注目したい²⁴。『葡萄酒・花・炎』は、詩人マックス・ジャコブ(1876-1944)

などの作家が寄稿したワイン賛歌のテキストに、エコール・ド・パリの画家による挿絵が添えられた挿絵本で、『我がが葡萄畑をめぐって』は先述のとおり葡萄畑にまつわる挿絵本である。本書が連作として計画されたものなのか、偶然同時期に類似主題の書籍が続けて出されたに過ぎないものかを知るための決定的な資料は見つかっていない。しかし本書の前後に続けて酒関連の挿絵本が刊行されたという点は、本書成立の文脈として一考の価値があるだろう。

そこで、本書およびその関連書籍が刊行された1950年代という時代に酒関連の出版物の刊行が続いた理由が何かあったのか、時代を考察すると、フランスのワイン文化や飲酒文化という観点から興味深い時期であることが見えてくる。フランスはキリスト教のミサでの使用などを背景に古くからワイン文化を紡いできたが、19世紀に大流行した葡萄畑の病害やその後の大戦と世界恐慌による不景気により、20世紀前半、劣悪なワインが市場にあふれるという状況が深刻化していた。そこで政府は原産地を統制するなどの法整備によりワインの品質管理やブランド化を徹底し、ワインの質を高めた²⁵。一方で生産販売者はワインをボトルにつめてラベルや広告にも工夫を施すことで、フランスワインのイメージを質の良い洗練されたイメージへと向上させることに努めていたという。そうしたプロモーションの一環で、ワイン商が芸術家に小冊子の作成を依頼し、芸術の力を借りてワインのイメージ構築を図った事例も見られる。そのひとつ、フランスのワイン商の老舗「ニコラ」が上客たちに配布するために制作した挿絵本『我がが医師：葡萄酒』²⁶（1936年刊）の挿絵を依頼されたのは、他にもないデュフィであった。同書はワインが身体や心の健康にいかにより良いかを説明した、購買促進のための絵本であるが、洒落た都市の生活を明るい色で生き生きと描くデュフィの絵の雰囲気は、ワインに洗練されたイメージをもたらしたい販売者にとってまさに相応しいものと思われたであろう²⁷。本書の直接的な制作理由とはならないが、国家レベルの取り組みやワイン業界の努力によってワイン文化が盛り上がり、またその影響が芸術家たちにも及んだ時代の延長線上にあった時期に本書が刊行されているという事実は、本書刊行の意義を探る上でも重要な要素であると考えられる。

4. おわりに

以上、著者ヴィルフオスの著述活動や人脈、同著者の作品を含む3つの挿絵本「酒3部作」の存在、そうした一連の作品が出版された時代背景を鑑みて、本書成立の背景を詳らかにするために今後求められる調査課題を整理する。第一に、ヴィルフオスが執筆した他の著作や資料を調査することで、著者の思考を追い、執筆の目的を追究することである。第二には、本書挿絵の複製元と思われる作品について調査することであり、本書とその作品との関連性を導き出すことで、本書の制作過程が垣間

見えることを期待する。第三に、デュフィや刊行元であるベルナール・クライン関連のアーカイヴ資料を調査し、そこに制作の背景を語る記録が残されていないか調べることが求められる。挿絵はデュフィ自身が選んだものなのか、また「酒3部作」と謳われることのある3冊が本当にシリーズとして意図されたのかどうかを、残された資料から読み解いていきたい。そして最後に、本書が誕生した背景でありまた本書が受容された時代ともなる20世紀のフランスにおけるワインや飲酒文化の動向についてもより深く考察し、同時代の作家の芸術活動や出版業界との関わりを分析することも課題である。ワインの新しいイメージが戦略的に流布され更新されていく中で、それに芸術家たちがどう反応し、またそのイメージ形成に芸術家たちがどのようなかたちで起用されたのかを調査することで、経済や社会と芸術の関わり、そこでの書物の役割を紐解いていくことを目指したい。

(公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館 司書)

註

1. Guillaume Apollinaire, Illustration de Raoul Dufy, *Le Bestiaire : ou Cortège d'Orphée*, Deplanche, 1911.
2. Stéphane Mallarmé, Illustration de Raoul Dufy, *Madrigaux*, Éditions de la Sirène, 1920.
3. Eugène Montfort, Illustration de Raoul Dufy, *La Belle-Enfant, ou L'amour à Quarante Ans*, A. Vollard, 1930.
4. Dora Perez-Tibi, "Raoul Dufy: The Illustrated Book" in *Raoul Dufy 1877-1953*, Arts Council of Great Britain, 1983, pp. 116-124; Dora Perez-Tibi, "Raoul Dufy et le Livre" in *Raoul Dufy, Réunion des musées nationaux*, 1999, pp. 212-221; David Bland, "The Twentieth Century France" in *A History of Book Illustration: the Illuminated Manuscript and the Printed Book*, University of California Press, 1969, pp. 329-360.
5. Direction de Paul Iribe, *Le Mot*, 20 vols., 1914-1915.
6. *Almanach des Lettres et des Arts*, Martine, 1917.
7. "Dufy, Raoul, Benezit Dictionary of Artists" in *Oxford Art Online*. Published: 31-10-2011. URL: <https://doi.org/10.1093/benz/9780199773787.article.B00055058>. Accessed: 03-10-2020.

8. Pierre Mornand, "Raoul Dufy" in *Vingt-Deux Artistes du Livre*, Le Courrier Graphique, 1948. p. 298; Jacques Lassaigue, Translated by James Emmons, "Chief Illustrated Books" in *Dufy (Taste of Our Time)*, Skira, 1954, p. 110; 「デュフィによる挿絵本リスト」『デュフィ回顧展』国立西洋美術館、1967年、頁付無。
9. フランスの挿絵本の歴史やデュフィの挿絵本について調査するにあたり、展覧会カタログや書籍として、註4と註8の前掲書に加えて下記を参照した。
- 展覧会カタログ
- Bibliothèque Municipale (Nice), *Exposition du Livre Illustré Contemporain, 1900–1950*, Pierotti, no date of publication.
 - Préface de Bernard Blatter, *Les peintres et le livre au XX^e siècle*, Musée Jenisch, 1979.
 - François Chapon, *Le Peintre et le Livre : l'Âge d'Or du Livre Illustré en France, 1870–1970*, Flammarion, 1987.
 - Jean-Paul Laroche, *Les Livres Illustrés par Raoul Dufy du Fonds Michel Chomarat de la Bibliothèque Municipale de Lyon*, Michel Chomarat, 1999.
 - Musée d'art moderne de la ville de Paris, *Raoul Dufy : Le Plaisir*, Paris-Musées, 2008.
 - Musée Marmottan Monet, *Raoul et Jean Dufy : Complicité et Rupture*, Hazan, 2011.
 - 愛知県美術館他編『デュフィ展: Rétrospective Raoul Dufy』中日新聞社、2014年。
 - Olivier Le Bihan, et al. *Dufy : Le Bonheur de Vivre*, Palais Lumière, 2017.
- 書籍
- Avant-propos de Claude Roger-Marx, *Anthologie du Livre Illustré par les Peintres et Sculpteurs de l'École de Paris*, Albert Skira, 1946.
 - W. J. Strachan, *The Artist and the Book in France: the 20th Century Livre d'Artiste*, Peter Owen, 1969.
 - Nicolas Rauch, *Les Peintres et le Livre Constituant un Essai de Bibliographie des Livres Illustrés, de Gravures Originales par les Peintres et les Sculpteurs de 1867 à 1957*, Alan Wofsy fine arts, 1991.
10. Fanny Guillon-Laffaille, *Raoul Dufy : Catalogue Raisonné des Aquarelles, Gouaches et Pastels*, L. Carré, 1981–1982, 2 vols.
11. 本書挿絵プレートと類似関係にあるパリ市立近代美術館所蔵作品と、上掲書におけるレゾネ番号。
- 口絵プレート《作家の肖像》:《自画像》1935年頃、パリ市立近代美術館管理番号AMD 776、レゾネ番号1734
 - 挿絵プレート1《ムーラン・ド・ラ・ギャレット (ルノワールに倣って)》:《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》1939年、パリ市立近代美術館管理番号AMD 791、レゾネ番号1985
 - 挿絵プレート2《生い茂る春の花》:《野花》1950年頃、パリ市立近代美術館管理番号AMD 785、レゾネ番号1360
 - 挿絵プレート4《赤く装飾された桃とサクランボ》:《果物鉢》1948年頃、パリ市立近代美術館管理番号AMD 787、レゾネ番号1466
 - 挿絵プレート10《うっとりさせる花冠》:《田舎風花束》1953年、パリ市立近代美術館管理番号AMD 786、レゾネ番号1358
 - 挿絵プレート11《豊かな恵み》:《セーヌ川、オワーズ川、マルヌ川》1938年、パリ市立近代美術館管理番号AMD 778、レゾネ番号1957
12. Maurice Laffaille, Fanny Guillon-Laffaille, *Raoul Dufy : Catalogue Raisonné des Dessins*, Vol. 1, Marval, Galerie Fanny Guillon-Laffaille, 1991, p. 236.
13. Roland Dorgelès, Illustrations de Raoul Dufy, *Vacances Forcées*, Éditions Vialetay, 1956.
14. "Dufy, Raoul, Benezit Dictionary of Artists," op. cit.
15. "Dufy, Raoul, Benezit Dictionary of Artists," op. cit.
16. アルフレッド・ワーナー『ラウル デュフィ』小倉忠夫訳、美術出版社、1972年、140頁。
17. Dora Pérez-Tibi, "Dufy, Raoul, Grove Art Online" in *Oxford Art Online*. Published: 31-10-2011. URL: <https://doi.org/10.1093/gao/9781884446054.article.T023961>. Accessed: 03-10-2020.
18. デュフィの線表現について、下記文献を参照した。
- 青木理「デュフィ、「線表現」豆辞典 アラベスクからジグザグまで」『デュフィ展: ポンピドーセンター所蔵』読売新聞社、2001年、142–148頁。
19. Jean-Pierre Babelon, "René Héron de Villefosse (1903–1985)" in *Bibliothèque de l'École des Chartes*, Vol. 144, No. 2, Juillet-Décembre 1986. pp. 442–443. URL: <https://www.jstor.org/stable/42959244>. Accessed: 05-09-2020.
20. René Héron de Villefosse, Illustration de Fujita Tsuguharu, *La Rivière Enchantée*, Bernard Klein, 1951.
21. René Héron de Villefosse, Illustrations de Maurice Brianchon, *À Travers nos Vignes*, Bernard Klein, 1956.
22. René Héron de Villefosse, Illustrations de Moise Kisling, *L'Épopée Bohémienne*, Bernard Klein, 1959.
23. Max Jacob, et al., Illustration de Maurice Brianchon, et al., *Vins, Fleurs et Flammes*, Bernard Klein, 1952.
24. 例えば下記売立目録が挙げられる。
- Lot n°501 [Collectif] Héron de Villefosse, René : [Trilogie sur les Alcools]. AuctionArt rémy le fur & associés, no date of publication. URL: <http://www.auctionartparis.com/ventes-aux-encheres-359/2016-05-20-bandes-dessinees-illustres-modernes/79546-collectif-heron-de-villefosse-rene-trilogie-sur-les-alcools>. Accessed: 30-09-2020.
 - Alde, *Bibliothèque oenologique Bernard Chwartz : Vente aux Enchères Publiques les Lundis 11 et Mardi 12 Avril 2011 à 14 h*. Alde, no date of publication. p.140. URL: <http://catalogue.drouot.com/pdf/alde/livres/11&12042011/ALDE-11&12042011-bd.pdf?id=9735&cp=8>. Accessed: 30-09-2020.
25. フランスにおけるワインの歴史については下記書籍を参照した。
- 山本博『フランスワインが語るフランスの歴史』白水社、2003年。
 - 前田琢磨『葡萄酒の戦略: ワインはいかに世界を席巻するか』東洋経済新報社、2010年。
 - 山本博『ワインの世界史』日本経済新聞出版社、2018年。
26. Gaston Derys, Aquarelles de Raoul Dufy, *Mon Docteur le Vin*, Draeger Frères, 1936.
27. 『我が医師: 葡萄酒』については、下記複製英訳版に概要や時代背景が解説されている。
- Gaston Derys, Watercolors by Raoul Dufy, Introduction by Paul Lukacs, Translated by Benjamin Ivry, *Mon Docteur le Vin*, Yale University Press, 2006.

ラウル・デュフィ
『生命の水：花と果物の精神』
(ルネ・エロン・ド・ヴィルフォス著)
のための挿絵
1954 年刊
石橋財団アーティゾン美術館

Raoul DUFY
Illustration for "Eaux-de-vie :
Esprit de la Fleur et du Fruit"
(Text by René Héron de
Villefosse)
Published in 1954
Artizon Museum, Ishibashi
Foundation, Tokyo



fig.1
《大地の果実》
エッチング
Les Fruits de la Terre
Etching



fig.2
《作家の肖像》
ポシヨワール
Portrait of L'Artiste
Pochoir



fig.3
《自然の楽園》
エッチング
Le Paradis de la Nature
Etching



fig.4
《ムーラン・ド・ラ・ギャレット (ルノワールに倣って)》
ポシヨワール
Le Moulin de la Galette (d'après Renoir)
Pochoir



fig.5
《葡萄の収穫の最中》
エッチング
Vendanges en Cours
Etching



fig.6
《生い茂る春の花》
ポシヨワール
Folles Fleurs du Printemps
Pochoir



fig.7
 《小麦畑の脱穀機》
 エッチング
Batteuse dans les Blés
 Etching



fig.8
 《秋の葡萄畑》
 ポショワール
Vignes D'Automne
 Pochoir



fig.9
 《赤く装飾された桃とサクランボ》
 ポショワール
Pêches et Cerises au Rouge Décor
 Pochoir



fig.10
 《皺の寄った布の上の梨と白いポット》
 ポショワール
Poiros et Pot Blanc sur la Nappe Froissée
 Pochoir



fig.11
 《乾杯の時間》
 エッチング
L'Heure des Toasts
 Etching



fig.12
 《干し草に横たわって》
 エッチング
Couchés dans le Foin
 Etching



fig.13
《芳しき山》
ポショワール
Les Monts Odorants
Pochoir



fig.14
《黄金の額縁の前の金色の果物》
ポショワール
Fruits Vermeils au Cadre Doré
Pochoir



fig.15
《香草と薬草の原生林》
ポショワール
Forêt Vierge D'Herbes et de Simples
Pochoir



fig.16
《うっとりさせる花冠》
ポショワール
Enivrantes Corolles
Pochoir



fig.17
《芸術家の休憩》
エッチング
Le Repos de L'Artiste
Etching



fig.18
《豊かな恵み》
ポショワール
Les Grâces Épanouies
Pochoir